

## Inferior lateral trunk から経動脈的塞栓で治療した tentorial dural arteriovenous fistula の 1 例

富尾 亮介<sup>1)</sup> 赤路 和則<sup>1)</sup> 植杉 剛<sup>2)</sup> 美原 貫<sup>1)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経外科

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[緒言] Inferolateral trunk (ILT) は tentorial dural arteriovenous fistula (d-AVF) の feeder となる一方、脳神経の栄養血管でもある。今回 ILT からの NBCA を用いた経動脈的塞栓 (TAE) で術後脳神経症状なく治療可能な tentorial d-AVF を経験したので報告する。

[症例] 60 歳女性。突然発症の左眼痛、嘔吐、軽度意識障害、左顔面感覚鈍麻、複視で救急搬送された。CT で左小脳橋角部を主体に脳底槽にクモ膜下出血を認め、また脳幹外側部、小脳脚、左小脳半球に一部脳出血を伴っていた。CT angiography および脳血管撮影では tentorial dAVF を認め borden 3, Cognard type4 だった。Feeder は middle meningeal artery (MMA) の petrosal branch と ILT の marginal tentorial artery で左 tentorial margin に shunt を形成し、drainer は varix を形成し小脳皮質静脈に drainage されていた。再出血 risk 高いと考え、経動脈的塞栓 (TAE) を施行した。MMA への cannulation を試みたが困難だったため、ILT に SL-10 を誘導したが蛇行が強く十分 distal までの誘導は困難だった。ILT 分岐部より distal にて internal carotid artery (ICA) を balloon 遮断した上で加温した 15% NBCA で TAE 施行し、NBCA は shunt point を越えて varix まで到達した。TAE 直後の造影で ILT からの shunt 血流は消失した。MMA petrosal branch からの shunt 血流は僅かに残存していたが停滞し、varix 内は造影遅延が認められた。術後は新たな神経症状の発生を認めず、複視、眼痛は改善し完全に消失。三叉神経周囲への出血による影響と考えられる左顔面の感覚鈍麻のみ残存した。

[結語] ILT からの NBCA による TAE によって術後脳神経症状の出現なく治療可能だった tentorial d-AVF の 1 例を経験した。